

# 新しい生活様式のための陶製品の開発(第2報)

高畑宏亮\*  
TAKAHATA Hiroaki\*

山内美香\*  
YAMAUCHI Mika\*

西尾俊哉\*  
NISHIO Toshiya\*

桐生恵叶\*  
KIRYU Keito\*

宮本ルリ子\*\*  
MIYAMOTO Ruriko\*\*

津守愛香\*\*  
TSUMORI Aika

**要旨** 新型コロナウイルスの拡大影響により、信楽焼業界の生産販売高は大きく落ち込み、感染予防から都市部での営業活動も進まず生産調整とともに事業継続の危機を抱えている。一方、一般家庭ではコロナ禍により密集を控え、家庭内で過ごす時間を大切にする生活様式が広がりを見せている。そこで、信楽焼産地が得意とする大物陶器製造技術および試験場が蓄積してきた製造技術を活用し、衣・食・住の各分野における生活の質を高め、新しい楽しみ方ができる陶製品のデザイン開発と試作を実施した。

## はじめに

コロナ禍により三密を避け家庭内や屋外で過ごす新しい時間の過ごし方が広がりを見せている。

本研究では耐久性や耐熱性の陶器の本来機能とこれまでの製品開発で培った技術を活かし、衣・食・住の各分野で新しく家庭で楽しめる陶製品の提案を3年計画として実施した。

### 1 「衣」陶製アクセサリー&ボタン

デジタル加工技術を利用して製作した樹脂型を活用した製品の開発。

宝石や樹脂にはない、陶器の質感や釉薬による多彩な表情、形状の豊富さをポイントにデジタル加工機を活用した樹脂型で型起こし成形によるボタンやアクセサリー、また石膏型を使い鋳込み成形による中空体のアクセサリーの製品試作を行った。

デジタル加工により型製作の迅速化が図れ、またサイズの拡大縮小が安易にできた。



図1 陶製ボタンとアクセサリー

### 2 「食」調理器具

コロナ禍によるステイホームにより内食需要が高まった。そこで家庭内での厨房で使える新たな機能を付加した調理器具の提案を行った。

今回は直火対応素材で成形した冷燻土鍋やホームベーカリー、また軽量材を添加した余熱調理鍋の試作を行った。さらに近年入手困難な低膨張材料のペタライトに代わるコージライトを使用した低膨張素地の検討も行った。



図2 冷燻土鍋及び調理例(スモークサーモン)

\*陶磁器デザイン係

\*\*デザイン指導支援員

#### 4 「住」RE PRODUCT 2022-

質の高い製品として玄関先や庭のエクステリアで使える過去のデザイン性の高い復刻版製品の提案を行った。今回は製品の付加価値を高めるため、1960年代クラフトデザインの専門家日根野作三氏らにより開発された製品の復刻版の試作提案を行った。



図3 パン焼き器



図4 余熱調理鍋



図6 1960年デザイン賞受賞 復刻燈籠



図7 デジタル加工技術を活用して試作した置物

#### 3 「住」手洗い鉢

コロナ禍による感染対策、環境への配慮を特徴とする質の高いものを生活の中に取り込む新たなライフスタイルで使える製品の提案を行った。今回は、素地にリサイクル素材や産地工場内の汚泥を利用し、加飾には伝統技法のロクロによる練り込み技法を使い、環境や伝統を意識した手洗い鉢の提案を行った。



図5 手洗い鉢



図8 パーティションスタンド

## 5 「住」玩具

信楽焼のたぬきの八相縁起をモチーフにしたすごろくで、ネーミングを「たぬうらない(たぬき×うらない)」としました。成形はデジタル加工機で石膏型を作り、型起こしにより中空体を成形し、音の鳴る鈴になるように異素材を混入しました。結果、高音で心地よい音色が鳴る鈴が試作できた。



図9 信楽透器製の玩具



図10 徳利型鈴の内部構造



図11 セラミックトナーによる上絵転写紙原稿

## 6 「住」干支置物

現在における「スローライフ」を意識した柔らかいデザインの干支の置物を提案で、各パーツの組み替えにより、デザイン・色彩における選択の幅や拡張性の向上が見込める。



図12 拡張性のあるデザインの置物

## 7 「住」加湿器

特許第4976010号「多孔表面陶磁器」の技術を活用した加湿器の試作を行った。ガラス容器を使うことにより、水の減り方が目視でわかり、多孔表面陶磁器の本数を変えることで加湿効果も調整できる。



図13 加湿器

## 8「住」陶製プランター

鉢の組み合わせや、組み換えによってガーデニングを楽しめるプランターの提案を行った。



図14 陶製プランター

## 9 まとめ

コロナ禍を経て、個人や家庭、社会生活をどのようにしたら、楽しく快適に充実できるかを想定し、機能的な要素も入れながら、陶器製品の提案を実施した。

また技術移転を図る目的で、今回の試作提案については、研究途中においても場内の展示交流スペースにおいて、展示紹介を行うとともに外部有識者(出井豊二氏: 京都女子大学理事・生活デザイン研究所副所長、奈良平宣子氏: 嵯峨美術大学名誉教授)と意見交換しながら改良・検討を行った。



図15 有識者との意見交換及び展示風景

今後も使われるシーンや空間を考慮したサイズや形状などのブラッシュアップを行うとともに、製品化につながる業界支援を図る考えである。